

# 世界に誇る卓球台の製造技術

伝えたい千葉の産業技術 100 選

登録番号	第049号
名称(型式等)	卓球台 infinity (インフィニティー)
所在地	株式会社三英
	千葉県流山市おおたかの森北 1-8-6
設立(竣工)年	昭和 37(1962)年創設

## 選定理由

千葉県流山市に本社を置く株式会社三英は日本のみならず世界を代表する卓球台メーカーです。世界大会で使用されることも多く、サプライヤーとして何度も卓球台を提供してきました。

平成 28(2016)年に開催されたオリンピック・パラリンピックで使用された卓球台が「infinity (インフィニティー)」です。

三英の前身は材木店です。卓球台メーカーに材木を卸ろしている中、板が反らない作り方として合板を考案したことから自身のところで卓球台を製造するようになりました。昭和 32(1957)年に千葉県流山市に卓球台専用工場を建設し、日本初の合板による卓球台を作りました。昭和 37(1962)年に卓球台の販売会社として三英は設立され、その後、卓球台の研究・開発・製造を手掛ける国内トップシェアメーカーになっています。

現在では、さらに公園施設の遊具やフィットネスマシンなどの製造も手掛けています。

卓球台「infinity」は品質はもちろんのこと、斬新なデザインでも高い評価を受けました。和のテイストを取り入れた木製の脚部に卓球の躍動感を表現した曲面のデザイン、天板に使われている鮮やかな色「レジュブルー(青い瞳)」が特徴的です。平成 23(2011)年の東日本大震災からの復興への思いを込め、台の脚部には岩手県産のブナ材が使用されました。卓球台の命ともいえる天板には三英が長年積み重ねてきた伝統の特殊合板技術が詰まっており、天板のどの部分にボールを落としても均一なバウンドを実現しています。天板の「レジュブルー」は光によって緑にも青にも見えるためどの国の選手にもプレーしやすい配慮や、復興への「新しい生命」というメッセージが込められています。世界最高の製造技術で製作され、芸術品のような美しさとプレーのしやすさを兼ね備えた卓球台が「infinity」です。

1991年	世界選手権(千葉)
1992年	バルセロナ1992オリンピック
2001年	世界選手権(大阪)
2009年	世界選手権(横浜)
2010年	ジャパンオープン(神戸)
2014年	世界選手権(東京)
2016年	リオ2016オリンピック
2019年	卓球ワールドカップ(東京)
2020年	東京2020オリンピック



写真1・2 卓球台「infinity」(インフィニティー)



写真3 脚部のカットモデル

協力：株式会社三英

参考資料：株式会社三英ホームページ

特集「アスリートを支える五輪の卓球台」 卓球王国 2016年8月号・9月号